

イエスはまなり



日本クリスチャン・アシュラム連盟

日本アシュラム

アシュラムとはスタンレー・ジョーンズ師がインドの退修方式を取り入れて創設されたキリスト教の新しい祈禱運動である。

開心・静聴・充滿・献身・奉仕 164号

主を知るチャンスに

エゼキエル書 6章 14節

島 隆三



3月11日の大地震と津波の災害は、至るところに大きな傷跡を残しました。大震災からの復興はこの先何年かかるでしょうか。その年月と莫大な経費もさることながら、この時を契機として日本も教会も新しくされねばならないと思われています。まさに我らの要するものは上よりのリバイバルです。

エゼキエル書に繰り返し出てくるのは「わたしが主であることを知るようになる」という言葉です。最初が6章ですが、この後数十回も繰り返されます。

「わたしは彼らに向かって手を伸ばし、この地を荒廃させ、荒れ野からリブラに至るまで、彼らが住むすべての地を荒れ果てたところとする。そのとき、彼らは、わたしが主であることを知るようになる。」(エゼキエル書6・14)

6章ではイスラエルの民が偶像礼拝に陥る時、彼らの住む地は荒廃し、荒れ果てた所になる。その時、彼らは神(ヤーウェ)こそ主であることを知るというのです。

神はイスラエルを選び、彼らを宝の民とされました。しかし、それは彼らは何をしても彼らを守り、祝福するというのではなく、彼らに与えた神の掟(律法)に従って歩む時に彼らは祝福され、それに背く時に彼らは呪われるという(申命記28章)神と民との契約に基づくものでした。この契約こそイスラエル宗教の特色です。そこには神の祝福もありますが、厳しい裁きもあります。しかし、彼らが裁かれた時にも、実は神が確かに生きて働いたもう証であり、神が主であることを彼らが知るチャンスとなったのです。ですからイスラエルに対する神の裁きは、実は彼らに対する神の救いでもあったのです。これは数千年のイスラエルの歴史(それは国が滅びて民族が散らされる苦難の歴史)において一貫して見ることが出来るものです。ここにイスラエル民族は、国家が滅亡し悲惨のどん底に落とされても、不死鳥のように甦ってくる秘密がありました。そうでなければ、イスラエルも周辺の国々と同じように、国家の滅亡と共にその宗教も文化も滅びる運命を辿ったでしょう。

さて、私たちもこの度の大地震に見舞われ、はたして東北は、また日本はこの先どうなるかという危機に立たされていますが、ここに神の裁きを見ると同時に、神の救いをも見ることが出来たらどんなに幸いでしょうか。これだけの災害をむだにしてはならないと祈りと決意を新たにしたいと思います。

(仙台青葉荘教会牧師)

霊 想



「立て、さあ行こう」

マルコ十四章三十二―四十二節

高松田村町教会牧師

唐渡 弘

第四十四回・関西アシュラム第二日目の「朝の祈り」、「一日のはじめの神さまとの交わり」のときを迎えました。今朝、「立て、さあ行こう」とのみ言葉を思い起こさせていただきました。

主イエス様は、十字架の苦難を前にして、三人の弟子をゲッセマネの園に伴い、「わたしとともに祈ってほしい。」と祈りを求められた。しかし、弟子たちは、疲れのためか、目を覚まして祈れず眠りこけてしまった。イエス様はその弟子にいたわりの言葉とともに時が来たことを知らせ、「立て、さあ行こう」と促されたのです。弱い弟子たちを何とかして、使徒として全うさせたい主の熱い思いとお姿を見る思いであります。

主イエス様は、今日のわたした

ち日本の教会を、どのように見ておられるのでしょうか。どのような心で、言葉を語りかけておられるのでしょうか。わたくしは、本当に目を覚まして祈っているかと問われたなら、確信をもって祈るときもありますが、どのように祈っていいのでしょうか、わからなくなるときもあります。

わたしたちが、救いを祈っている日本の社会は今、どういう時代であらうかと考えます。経済大国になりました。平和であります。感謝すべきであります。しかし、人々のきずなが失われています。命が大切にされない、心のことが語られない、自己中心を源流として、自己追求、自己拡大の濁流に流されていると思わざるを得ません。

イエス様の言葉を思い起こされます。「今の時代を何に比べようか。それは子供たちが広場にすわって、ほかの子供たちが呼びかけ、『わたしたちが笛を吹いたのに、あなたたちは踊ってくれなかった。吊いの歌を歌ったのに、胸を打ってくれなかった』と言うのに似ている。」(マタイ11の17)この言葉は、わたしたちの宣教にもあてはまります。呼びかけがためらわれる、呼びかけても応えてくれる人々も少ないように見えます。どうすればよいのですか。

この時代に、どうすればよいの

か。ある方の言葉を思い起こします。

十九世紀にイギリスにトマスカーライルと言う思想家がいました。サーター、リサータス(衣装哲学)という本を書いています。はじめのところは、人生についての煩悶を書きまして、神の支配であるとか、人生の意味であるとか、そういう事がらがわからなくなってしまう。それでスイスに行きまして、高い山の頂を眺めながら、神の審判のことを考え、人生のことを考えて、「永遠の否定」エバーラスティング・ノーに到達した。その時に天より、「あなたの上に最も近い義務を果たせ」という声を聞いた。思想の問題としてすべてのことがわからなくなり、すべてのものを否定した時に得た天よりの答えは、「あなた自身の身辺の義務を果たせ」という命令であった。そこで豁然として目が開け、人生の義務を果たすという心で周囲のものを見た時に、「永遠の肯定」エバーラスティング・イエスに変わった。これがその本の趣旨です。(矢内原忠雄、人間の生涯は幸福であるか・講演より)

今年の関西アシュラムの主題は「キリストへの明け渡し」。聖句は黙示録三章二十節のみ言葉です。キリストへの明け渡しとは、献身のことでありましょう。恵によりて、罪から贖われて、神の僕となりました

わたしたち。わが身は土の器です。壊れやすいものです。しかし、この土の器に宝を持つのです。わが身、わが人生を神にささげるならば、聖霊に満たしていただけるのです。聖霊に生かされ、導かれるところに祈りがあり、愛の働きがあるのです。そこに、宣教のわざも、失望せずに行われるのです。

一切を捨てて主に従った弟子たちに主は語られました。「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて従いなさい」(マタイ16の24)と。自分を捨てるとは、どういうことでしょうか。自分の十字架とは何でありましょう。そのことを主に教えられ、自分を捨て、自分の十字架を負うとき、神のみわざを見せていただくのです。みこころが天に行われるように地上に行われるのです。

わたしたち、「立て、さあ行こう」との主のみこえを聴いて、わたしたちを伴い、先立ち行かれる主に従います。



証 立 「見えないものは永遠」 天門教会 藤井 昇

わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ、見えるものは一時的であり、見えないものは永遠につづくものである。

三月十一日に起きた東北・関東大震災とそれに伴う大津波により、家屋・財産と共に尊い三万人近くの人命が失われました。

前掲のみ言葉のように見えるものは瞬間に消え去ることを、つくづく実感させられました。「わたしたちの国積は天にある」(フィリピ3・20)この世では、旅人であり、寄留者であり地上に永住の住家はありません。霊・肉に於いても揺さぶられ震われることの多い生活です。私も試練と天災を経験いたしました。娘が未だ二歳十ヶ月の時、礼拝後小公園の墓前礼拝に参加のため、西武新宿線の野方駅で家内が切符を買っている間に先に踏切りを渡った兄達を追い既に遮断機が降りていて、急行の本川越行が通過し、その風圧を受け横転し側頭部が裂傷し、救急車で浄風園病院に運ばれると言う知らせを集会中の私に知らせが飛び込んできました。自転車で野方駅に着くと駅で急行が停車し、運転手が後方

を窓から見ていて踏切り近くには血痕が付着していました。その後病院に駆けつけると言う、誠に九死に一生を得た事故でした。主は風圧の盾で守って下さったと只々感謝するのみです。

もう一つは、これも聖日の夕方から夜半にかけて中野・杉並地域に集中豪雨が降り、近くの妙正寺川や杉並を流れる善福寺川が氾濫し我が家の前の私道も膝の深さの川に化しアツと言う間に玄関から流れ込んだ水で床上浸水となり、タンスも下段の方は水がつかかり使用不能となり、本も頁もめくりながらあかした若い経験をしました。しかしこの経験も大地震や津波で被災された方々のことを思えば些細な経験です。アシラムの提唱者であり先がけとなられた、海老沢宣道先生はアシラムの真の目的は只のキリスト信者ではなく、誠のキリストの弟子となることだと云われました。イエス・キリストの復活の命を共有し、生涯を主に捧げた、大衆伝道の第一人者の本田弘慈先生の座右の聖句「霊に燃え、主に仕えよ(ロマ12・11)」とのみ言葉を継承したく願っています。少年サムエルが神の声に聴従し「しもべは聞きます。お話をください」(Iサムエル3・10)。とここにアシラムの静聴の原点があります。このことを信仰生活の基調として、主の

み声を朝ごとに聖書から聴いて新しい目を始めたいと思います「人は皆、草のようで、その華やかさはすべて、草の花のようだ。草は枯れ、花は散る。しかし主の言葉は永遠に変わることがない。これこそ、あなたがたに福音として告げられた言葉なのです。」「真の命を得るために、未来に備えて自分のために聖国の基礎を築くように。」

(Iペトロ1・24、Iテモテ6・19)と。終わりに新聞の掲載写真に大津波にも負けず浜辺に大輪の水仙の花が咲いている写真を見て詠みました。「津波去り がれきの隙間耐え忍び 咲く水仙の 命かがやく」

第44回関西アシラム報告

脇田 真一

二〇一〇年一〇月一〇日(日)午後三時〜一日(月)午後二時まで、神戸市東灘区御影町の「母の家ベテル」で、第四回関西アシラムが開催された。定刻までにほぼ全員が揃って、開会の祈りの時を迎えた。参加は十四教会、二十八名(信徒十七名、教職十一名)であった。主題は「キリストへの明け渡し」、主題聖句は「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受けらる。そして、地の果てに至るまで、

わたしの証人となる。」(使徒言行録一章八節)である。十日(日)の「開会の祈り」は小島十二師が担当し、「開心の時」は辻中昭一師が担当した。今回は特別に助言者として唐渡弘師(日本イエス・キリスト教団高松田村町教会)を招き、同師が「福音の時」「朝の祈り」「充滿の時」をすべて担当して下さった。なお、十一日(月)「静聴・分かち合い」は古河治師が担当した。

今回の助言者は牧会で体験した数々の実例を引用しながら話されたので、分かりやすく、信仰生活の向上に非常に役立つものであった。新来会者から来年も是非出席したいとの声もあり、神に栄光を帰して集会を閉じることができ、深く感謝している。



第45回九州アシラム報告

鯨島 則雄

第四五回九州アシラムは、昨年一月二日(火)～三日(水・休日)の両日、最近ではすっかり会場として定着した福岡『黙想の家』(宗像市)で開催されました。

今回の助言者は日本バプテスト連盟・平針キリスト教会協力牧師・今村幸文師をお招きし、総主題『聴従』として、主のみに静まり、それぞれが抱えている問題を祭壇に差し出し、主よりの導きを祈り求める二日間となりました。永年北九州の教会で牧会されていた今村師を慕って、かつての教会員や親しい方々も集まって共に再会を喜びつつ、恵みをいただくことができました。以下はある深い傷を負い、その癒しを求めて参加された方の祈りと証しの紹介です。

私が初めてアシラムに参加したのは、もう二五年近くも前になります。東京聖書学校の舎監をしておられた横山義孝先生のお勧めで、池ノ上教会のアシラムに部分参加したことがはじめの一歩でした。グループに山崎製パンの社長がおられたのには驚きでした。

それから四半世紀を経て、九州

アシラムに参加するとは思っていませんでした。

今回の助言者が、生前父が執事をしていた教会の牧師であられた今村幸文師ということで、部分参加でも、と祈ったところ、大学生の息子もすんなりと「行く」と言いまして、母(被害者の伴侶・記者注)も快諾したので、会員数名を誘って参加することができました。今回のアシラムは、私にとつて特別な思いがあります。今年(二〇一〇年)の三月三日に、犯罪によって殺された父の裁判が一月一七～一九日に控えているからです。犯罪被害に遭った遺族として、キリスト者として、どう生きていけばいいのか、日々神に祈っています。思えばこの半年間守られたと思います。私も母も弟も毎日仕事に行っていますし、今まで通りの生活をしています。

私の祈りと願いは、父の死を通して救われる方が起こされる事です。父の社葬には、全国から一五〇〇名ほどの方が来られました。リバイバルでした。ほとんどの方がキリスト教葬儀は初めてだったからです。この日本にリバイバルが来ますように祈り求めています。

以上が、現在北九州で牧会されている女性牧師の祈りと証しです。

「一粒の麦が地に落ちて死なな

る。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる。(ヨハネ福音書一二章二四節)」

今回のアシラムに参加された前述の「大学生の息子」さんが、献身の決意表明をされました。主の御名を崇めます。現在は、来春の神学校入学に向けて祈り備えておられます。私たちが他の参加者も大いに恵まれましたので、今秋の第四六回の九州アシラムでも今村幸文師に助言者としての御奉仕が決定しています。



報告



●第19回日本クリスチャンアシラム連盟理事会は、去る6月16(木)、17(金)、池の上教会で恵みの内に開催されました。次号で詳報します。

各地区アシラム等予告

●第46回九州アシラム

とき 11年9月18日(日)～19日(月)

ところ 福岡黙想の家

助言者 今村幸文師

●第49回関東アシラム

とき 11年9月19日(月)～21日(水)

ところ 山崎製パン箱根山荘

助言者 大分恵みキリスト教会牧師 岡山敦彦師

●第45回関西アシラム

とき 11年10月9日(日)～10日(月)

ところ 御影「母の家ベテル」

助言者 村瀬俊夫師(日本長老教会牧師)

会(牧師)

〒一八一〇〇一一 三鷹市井口3-15-6
池の上キリスト教会内

日本クリスチャン・アシラム連盟

振替口座 東京〇一〇〇一四五五八